

はじめに

平成 25 年度、「心と体をひらいて学ぶ」を学校教育目標として、生徒に「実社会・実生活に生きる力」をはぐくむために、教育課題を「協同的な学びにより思考活動の質を高める」に焦点化し学校運営してきた。そこでは、「公共性」「公正性」「卓越性」を重視する学びの共同体に基礎を置く学校づくりを推進した。また、教師力が高まることにより学校力が高まり、その中で生徒に学校教育目標が実現されるという考えに基づき、授業づくりと集団づくりのそれぞれに教師の指導指針となる重点目標を設定し、教育課題の解決を図るようにした。

一つ目の成果はまず学力面で表れた。全国学力・学習状況調査（被験者・3年）において、平均点が全国や長野県の平均点を上回った。特に、思考・判断・表現の力を問うB問題に対して全国でトップレベルの結果を残したことは特筆すべきことである。また、学び合う生徒の姿からは、生徒が「聴き合う関係」を構築し、誰とでも学ぶことができる中学生に成長してきている。3年生を中心に生徒は「基礎・基本の力」としての思考・判断・表現力を高めながら「自立した学び手」へと成長している。

続いて、二つ目の成果として円滑な人間関係が保たれていることが挙げられる。生徒たちは爽やかな挨拶を交わし、協働することに喜びを感じている。また、集団生活において、リーダーとフォロワーの関係を理解し強化することができた。生徒は学びの共同体の中で「団結心」を深めている。

以上の成果は、先生方が「対話型コミュニケーション」を大切にして授業づくりや集団づくりを行ったことにより実現したことである。また、生徒は、そのような先生方の努力を肯定的にとらえている。「聴く、問う」ことから成り立つ言語活動は、協同的な学びを活性化させ生徒の思考活動の質を高めるとともに、生徒と生徒、生徒と教師の絆を強める役割を果たしている。そこからは、「心と体をひらいて学ぶ授業実践を通して、実社会・実生活に生きる力をはぐくみ、自立した学び手」を育成する学校づくりには「対話型コミュニケーション」の定着が欠かせないことが明らかになった。

本年度は、3つの見地に立ち、「心と体をひらいて学ぶ生徒」を実現し、生徒を「自立した学び手」へと導いていく。そのときの学校づくりの方向性と重点目標は次のとおりです。

～平成 26 年度の学校づくりの見地～

1 方向性について

- (1) 義務教育9年間で「協同的な学び」でつなぐ一貫教育の充実
- (2) 木島平型コミュニティ・スクールの推進
- (3) 「農」を基軸とした体験的な命の教育の構想

2 重点目標

- 重点1** 学んだことの意味や価値を自覚できる生徒の育成
- 重点2** 力を結集して、目標を達成できた喜びを実感できる生徒の育成